

拙著「裁判員制度はいらない」の感想文(第46号「ほんとうに」裁判員制度はいらないか?)に對する著者の感想を述べる。

自民党年来の司法改悪方針の申し子である司法制度改革審議会は、「健全な国民常識を直截に裁判に反映させる」「裁判員制度は被告人のための制度ではない」という結論を出し、それが小泉首相(当時)によつて「国家戦略」と宣せられた。

しかし、評者は、そんな経緯は一切触れない一方、この本の根底にある著者のメッセージは、「素人にはしよせん無理」「素人にはまかせられない」「専門家に任せておけ」などであろうと推測した。文脈からすると推測と言うよりも断定に近い。私は「一般市民を能力不足として切り捨てる考え方」の持ち主でもあるらしい。恐るべき曲解であり、途方もない誤導である。私はどこでそのような見解を表明しているか。

私が裁判員制度に反対する理由は、本書第五章「また赤紙で召集される」と第六章「人権と民主主義が崩壊する」に詳述したとおりである。その論述にもかかわらず、評者は、私が言っていることについて黙して語らず、私が言っていないことを言っていると論じた。

第二。「素人にはしよせん無理」「素人にはまかせられない」「専門家に任せておけ」。つい最近まで

そう断言していたのはほかでもない最高裁だ。それが「事実認定はそんなに難しくない」などと恥ずかしげもなく突然大化けし、いまや年間13億円の広告費(それもわれわれの税金だ!)をつぎ込んで裁判員制度、裁判員制度と大騒ぎをしている。裁判所の「大転換」を評価するのか、それは変だぞと見るのか。欺瞞を指摘する著者の主張(本書98頁、122頁)は、減らそうとする組織的努力が見られ、ることになったのか。重大な論点から目をそらしたまま、「裁判員制度はダメかと問われれば必ずしもそう思えない」とひらり転換

# 裁判員制度は本当にいいらない

する。ごまかしてはならない。

ポランティア? 言うも愚かだが、国が処罰をもつて市民に強制する行為をボランティアとは言わない。それはかつての「国民総動員」を横文字時代調に言い換えただけのものだ。「国」とは別の「公」がある? それこそはやりの偽装論法である。目くらまし役をすんで買つて出、「国のわるくみなどと言つていないで社会を少しも良い方向に動かそう」などと言いつつ手合ひこそ、私が本書中で叩いた「見るべきを見ず、語るべきを語らない」人たちである(本書180頁など)。いつか見た「文化人」がここにもいる。徹底的な「法と心理学会」シンポジウム(第五

回大会)でさえ、法律学者からは繰り返し裁判員制度への懸念が表明されていた。そのことを評者はお忘れではないだろう。

第三。「世の中は悪くなるばかりという、いささか気の滅入るメッセージが繰り返されているので、あまり明るい展望がもてない」。これこそ看過し得ない見方である。「私の書きぶり」の論評に評者の時代観が如実に表れているからである。政府や自民党の要人が核武装を論じようが、教育基本法が改悪されようが、自衛隊の海外活動が本務になるうが、そして憲法を変えて戦争を始めようとする動

きがいから切迫してこようが、「世の中は悪くなるばかりとも思えない」とつぶやき、「気が滅入るような暗いことばかり言うなよ」と洩らすのである。では聞く。この時代は「明るい展望がもてる」時代か。もてないとすればそれはいつたい誰にその責任があるのか。当世の見方がこの程度では、権力にすり寄り人々を見る目もとるところにしろけよう。

第四。検察審査員経験者に呼び出されたときにはできればやりたくないと思つていた人は約60パーセント、しかし終わったらほぼ全員がやつてよかったに変わった、という「現実のデータ」があ

るそうなる。そのデータについて、私は寡聞にして知らない。不明は詫ひるが、それほど良い気分になったのなら体験を生かして裁判員もやりたいとどこからか声が挙がつてよさそうなのだが、政府のパブリックコメントにも検察審査員体験者の意欲的発言など登場しなかつた。「感動の50万人」はどこに行つてしまつたのか。

率直に言わせて貰えば、国の行為にクレームをつけるだけで基本的に強制力もない(少なくとも現在のところ)検察審査員と、自らの判断により国の権威において人に死刑を言い渡す裁判員を並べ

て参加意欲や負担感の差異を論じること自体ナンセンスに近い。

第五。質問票。「すべて尋ねられた陪審員はいないと思つた」「普通の陪審裁判ではこのような質問はないし、重大な裁判でもこんなに細かいくない」「また神話が生まれた」。何を言つか。私が著書中で示した質問票は、「神話」でもなければあり得ない話でもない。それは、裁判員制度の旗を振りまくる日弁連中枢が調べた陪審事件(アメリカ)の実例なのだ。学者らしくもなく調査不足の失敬な指摘である。

第六。「本当に裁判員制度に反対するのなら、裁判員にならないな

どという違法かつ姑息な手段をとらず、裁判官に裁判員をやりたくない理由を言え。評議の場でもの申せ。裁判所に出頭しないことを推奨するな。」  
よくよく勘違いし、もしくは誤導を好む人だ。私は、不出頭を推奨しているのではなく、施行前にみんなの力でこの制度をぶち壊してしまおうと言つているのである。この人は、本当に戦争に反対するのなら反戦運動も違法かつ姑息な兵役拒否もやめ、戦地に赴いて抜剣振りかざしながら反戦を説けと言つている。

評者の感想と私のこの感想をともに読まれた裁判ウオッチング千葉の皆さん。「論点は分かつた。では、きちんと読んで自分の感想を持つ」と。そう思つていただければ幸いです。澄んだ民衆の目で鋭く拙著をウオッチしてください。  
2006.12.23 高山俊吉



今回は、高山さんの反論を掲載するため、「司法の動き」はお休みします。10月、11月、12月分は、次号にまとめて掲載の予定です。